



## 特別賞 三省堂書店賞

書評 藤原正彦, 小川洋子著『世にも美しい数学入門』

(筑摩書房 2005年)(和泉開架 410/531//W ほか)

法学部2年 飯塚郷太郎

「どこまで数学を築いたかは、人類の栄光みたいなものです。そういう意味では、すぐに役には立たないけれど、非常に価値のある知の結晶みたいなものです。」(P,168)

本書を読み進めていくうちに、数学が持つ神秘性や奥深さに私は圧倒され、その魅力に引き込まれた。

私がこの本を手にしたのは、数年前に小川洋子氏の『博士の愛した数式』を読んだことで感銘を受け、他の作品も読んでみたいと思っていたからである。また、本書は小川氏が自身の作品である『博士の愛した数式』も取り上げ、数学者と談話するという内容であったため、興味が湧いたというのも理由の一つだ。

本書は作家の小川氏と、『国家の品格』の著者として知られる数学者の藤原正彦氏との対談形式で、二部構成となっている。対談の内容は主に数学の話であるが、数学の話というと、難しいとか、取り付きにくいなどという先入観があるかもしれない。しかし、本書はそのような固い印象が全くない。数学の世界について、面白いエピソードを交えて解り易く解説しており、そして読者に、数学の持つ圧倒的な美しさについて教えてくれる。

〔第一部 美しくなければ数学ではない〕は、数学者の歴史や、数学の持つ美しさについて対談するという内容である。私が特に惹かれた部分として、永遠の真理のもつ美しさ(P,32)では、三角形の内角の和について語られている。「『三角形の内角の和が180度である』という一行が持っている永遠の真理は何物にも侵されない。」言うまでもなく、どのような形の三角形を書いても内角の和は180度であり、それは百万年前も、現在も、百万年後も、宇宙の果てであっても変わらない。このような普遍の真理は、数学以外この世界にはないと語られている。数学の世界と比較すると、普段私たちが使っている「永遠」という言葉がいかにいい加減なものであるかということを感じてしまう。このような時空を超えた普遍性という面に、数学の美しさを垣間見ることができる。

〔第二部 神様が隠している美しい秩序〕は、具体的に数式や図形を使って、数学の世界を紹介していくという内容である。数学の発展は地域ごとの美的意識、宗教観と密接に結びついているというのだ。まさか数学がその風土の文化的影響を受けるものだとは思わないだろう。本書は、数学に対する新しい見方も教えてくれるのだ。

「生まれてきてよかったと感じさせるものは美や感動をおいて他にないだろう。」(P,173)藤原氏はこのように語っている。本書は数学を媒体として、作家と数学者が各々の学問に通じる「美と感動」を見出そうとする姿が集約されており、そこから読者は「美と感動」の素晴らしさを感じることができる。また、学校の授業では習わないであろう数学の魅力がたっぷり詰まっているため、数学嫌いの方にこそ是非一読してもらいたい一冊だ。きっと数学に対する印象が一変するだろう。